

## 世界遺産アカデミー認定講師 File No.17

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓発活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当て、お話を伺います。第17回は世界遺産アカデミー正会員の小野鎮(おの・まもる)さんです。

### ——ユニバーサル・ツーリズムとは ～世界遺産とバリアフリー～

旅行業界に50年間従事してきた私が、世界遺産の勉強を本格的に始めたきっかけは、都内のある専門学校で開設された「ユニバーサル・ツーリズム」学科の学科長に就任したことでした。2008年に学科授業として世界遺産を取り入れようと提案したところ、学校側に認められ、私が授業を受け持つことになりました。世界遺産の知識をどのように教授していくべきか熟考していたところに、世界遺産検定の存在を知り、学生たちに手探り状態で教える一方で、私自身も世界遺産検定受検のための学習を始めました。3級、2級は順調に合格したものの、1級は一度失敗。2回目のチャレンジで受かって、なんとカマイスターとなり、2年前に認定講師として認定されるに至りました。今年は4月から日本外国語専門学校で前期の全10回講座を担当し、現在は引き続き、後期の全10回講座を担当しています。我々の世代は行った場所が後で世界遺産

となったところも多いですが、今の学生たちはまだ行っていなくてもそれが世界遺産であることを知っており、いずれそれらを訪ねて行くことでしょう。たまたま訪れた場所が世界遺産だったことで関心を持つようになったと話してくれた学生もいます。世界遺産だから価値があるのではなく、価値があるから世界遺産だということを伝えながら、世界遺産を単に知識として学ぶのではなく、旅行・観光産業の中での位置づけ、観光資源としての側面、他の文化、宗教を理解していく国際的視野も重視しています。

そもそも世界遺産との出会いは、旅行業を通してでした。旅行業界に入ったのは1964年で、一般的な観光客のためのツアーではなく、医療や福祉、教育といった専門的な調査・視察団や研修グループ、国際会議参加団体などを取り扱っていました。そうした経験が積み重なるにつれて、1988年頃からバリアフリー旅行に関心を持つようになりました。80年代当時、「障害者旅行」と言われていたのが、徐々に「旅はリハビリ」といわれるようになり、次第に「バリアフリー旅行」



2011年7月、ローマの歴史地区、コロッセオにて。古代ローマの統治能力、都市計画や建築技術には魅了されてやみません、と小野さんは語ります。

として本格化し始め、2000年代には「ユニバーサル・ツーリズム」としてもっと幅広くとらえられるようになってきました。

実は、この「ユニバーサル・ツーリズム」を世の中

に普及させることが、私の大きな命題です。しかし皮肉なことに、バリアフリー化の推進は、世界遺産に求められる「完全性」と「真正性」に相反することもありがちです。ありのままの自然環境、伝統を守る文化財の素晴らしさを損なってしまう懸念にジレンマを感じています。たとえば、車椅子の方がピラミッドに上るためにはスロープやエレベーターが必要ですが、その設置が100%正しいことなのでしょうか。ヨーロッパでは、昔ながらの建造物そのまま引き継がれていく傾向にありますから、新しい設備やシステムを導入するのはとても困難なことです。中心地の総合駅などは徐々に改築されてはいるものの、数十年前に設置されたドアが手動式のエレベーターや旧型のエスカレーターもあります。同様に、ニューヨークの地下鉄もエレベーターが設置されている駅はごく僅かです。一方で、ヴァティカン市国のサン・ピエトロ大聖堂には正面入口の脇に昇降機が備わっていて、正面玄関にある高さ20cmほどの段差には長さ2m程度の板が置かれていました。この板は取り外しが簡単ですので、文

化財としても歩み寄った対処だと思えます。また、長野パラリンピックが開催された1998年には、多くの選手たちが国宝である善光寺を訪れました。善光寺は、段差が困難な選手たちのために、本堂東側には、取り外し可能な木造スロープが設置されて今に至っています。新しい設備を造ることはそう簡単にできることではありませんが、こちら側の要望と相手側のネックを相談し合えば、今あるもので工夫できることもあるかもしれません。総本山と銘打っている小高い場所にあるようなお寺さんなどは、資材を運び込む車両用の坂道などがあれば、そちらを使用させていただくことも可能ではないでしょうか。

日本国内では2006年にバリアフリー新法が制定され、今では、1日3,000人以上出入りする駅や公共施設をバリアフリー化していくという基本方針が掲げられています。私は、特に公共施設や設備のバリアフリー化の進み具合は、日本は世界でもトップクラスだと思います。一方で、ハード面が整っているにも関わらず、我々は、それらハードをどのように使いこな

していくか、周囲の人々がどう優しく接していくか、という課題を抱えています。身体的不自由があるうがなかろうが、言語に違いがあるうがなかろうが、人は皆、同じ人間です。おもてなしの心配りを忘れないでほしい。「ユニバーサル・デザイン」とはそういうことではないでしょうか。

UNESCOは世界遺産を通して国際的な平和理念を謳っていますが、異文化だけではなく、支援を必要とされる方々への壁も解消してこそその、平和理念ではないでしょうか。容易に辿りつけない山頂や島などに神聖な教会が建設されていますが、神を信じる人々はすべて平等のはずです。マイノリティの人たちのために、設備や外国語対応の案内表示、ガイドなどが必要とされています。もちろん、できることとできないことがあります。しかしながら、マジョリティとマイノリティとの差異を埋めていくために歩み寄ること、人と人とのお互いのコミュニケーションが大切だと思います。